

春燈

5 月号

May 2014



主宰の句

安立公彦

めぐり来る三年の春や震災忌

会はざりし人の訃報や冴返る

如月のさざなみ明り隅田川

糸遊や句碑の文字追ふ浅草寺

石庭の日の影しろき余寒かな



久保田万太郎の句

まゆ玉やあはれ一人のもののおもひ

『流寓抄以後』昭和三十八年

万太郎文学に影響を与えた永井荷風が昭和三十四年逝去。三十六年には俳優の喜多村緑郎氏が他界している。繭玉を前に「あはれ」の感動詞のあと「一人のもののおもひ」には心の支えであった友の死に孤独地獄を覗かせ、晩年の淋しい孤嘆がある。万太郎先生は俳壇屈指の俳人と言われたが「私は小説家であり劇作家である」といい、「俳句余技」を死の至るまで替えなかった。

園部 蒨郷

久保田万太郎の句

ボヘミアンネクタイ若葉さわやかに

『流寓抄以後』昭和三十八年

「永井荷風先生、逝く。……先生の若き日を語れとあり」の前書。明治四十三年、慶応大学文科の改革で永井荷風は主任教授就任と同時に「三田文学」を創刊し主宰。これを期に「作家たらんと志す」万太郎は二十一歳。真黒な服、真黒な帽子、真黒なボヘミアンネクタイという、荷風先生の窮極のダンディズムは万太郎の憧れの的であり、文芸の生涯の師と仰いだのである。

青柳雅子

燈下集



○ 松山三千江

雪だるまひとりでつくる男かな

雪解けて公民館で聴く落語

抱き人形片目で眠る臆かな

如月や音なく落つる砂時計

クッキー缶に春いつぱいの刺繍糸

○ 赤羽陽子

如月や風の厳しきビルの街

玉砂利を雀の跳ぬる浅き春

鬼やらひ境内つつむ声揺らぐ

紅梅や社殿の奥のうすき闇

藤棚の芽吹きも固く日枝神社

○ 加藤千春

歩み来し日を手繰り寄せ糸編む

人と逢ふことが大好き日向ぼこ

陰膳の湯気ほのぼのと春の立つ

歌に飽き坊主めくりとなる歌留多

春の風邪三歳の児にいたはらる

○ 都丸美陽子

武蔵野や春まだ浅き石の冷

東の間の夕日はなやぐ梅の里

灯を消せば妖しく笑まふ雛かな

ふらここを天まで漕ぎて嫁ぎけり

それぞれの身過ぎの色や春シヨール

○ 中澤 弘

馬捨て場跡の靡るる余寒かな

啓蟄や漢傘寿の四股を踏む

淡雪の昼餉母郷のしもつかれ

末黒野を訪うて対峙の筑波山

バレンタインデー苦み走つた豆腐屋来

○ 篠原 幸子

追究の甘さを突けり春深雪

梅が香や土ふつくりともぐら塚

物の芽のむらさき匂ふ太さかな

葉を解いてアネモネ彩を尽くしけり

あたたかや軽き会話に癒さるる

○ 藤原 若菜

春浅し色留袖の一つ紋

单身赴任了ふる報せや地虫出づ

料峭の渚や若き松林

玉石の白きを沈め春の水

灯さるや紅白梅の香のいよよ（祝・受賞）

○ 市川 玲子

一瞬の不覚の入院春の闇（腰椎圧迫骨折）

雪深々ナースの所作のてきぱきと

入院のベッドにて問ふ雪の嵩

春寒や肩にかけたる母のもの

健やかにと祈りは一つ初節句

○ 大文字 孝一

葬列の過ぎ行く道や残る雪

浅春やくぐもり残す鳥の声

使ひ初む真塗りの椀冴返る

やんはりど断る誘ひ春浅し

如月や狭さまた良き仮住ひ

○ 和田 絢子

幼ナ声の交じる気合の寒稽古

句会一番乗り元校長の冬帽子

紅梅の盛りの鉢の置きどころ

臘梅一枝箸置にしてひとりの膳

強東風や課題の本の『夜と霧』

当 月 集

安立 公彦選



○ 茂木なつ

雪あかり野面や月の沙漠とも

甘露煮の火のころと雪しまく

古雛のつまんでみたきチョコレート

啓蟄の虫の性にも十色かな

今日の日を溜めて大志や牡丹の芽

○ 中村紀美子

春耕や祖母在りし日の鎌の音

霾や古寺にかかりし曼荼羅図

福耳は母ゆづりなり桜餅

金泥の屏風ふるびし桃の花

鞆や鷹女にならひ耳隠し

○ 後藤眞由美

金縷梅や鄙の古刹の深廂

風光る土鳩のさぐる樹の洞ろ

薔薇の芽や胸の奥処の炎立つ

魚祭る獺の顔して季寄せ繰る

冴返る闇に島の灯瞬けり

○ 西岡啓子

薄氷の小さき風をとらへけり

下萌や水辺に憩ふ夫婦亀

印旛沼見ゆる樹間や春しぐれ

涅槃図に膝行しつつ仰ぎけり

空仰ぎ樹々をあふぎて春なかば

○ 山崎刀水

鳥帰る夕空を声つなぎあひ

山笑ふゆるみて風に鳴る門扉

大利根や眼を閉ぢて聴く初雲雀

木の芽和事なくひと日過ぎにけり

筑波嶺を水面にゆらし蜩舟

春燈の句

安立 公彦選

わが里に百寿の春の余生かな

埼玉 原田たづ糸

百寿とて賜はる梅花愛あふれ

去年植糸し白梅香る狭庭かな

思ひ出や過ぎし三月お水取

嗚呼八十路快調不調の朧月

疾く癒えよ友に会ひたし揚雲雀

埼玉 長谷 仁子

住み馴れし古家に紅梅薫りをり

夫の介護の帰路や夕日のつくしんぼ

白梅に風の来てゐる朝の窓

三重 上野 進

空家増え里の消えゆく二月かな

灯を消して闇を呼び込む冬座敷

残雪を踏み鳴らしては水を汲む

啓蟄や洗濯竿の揺るる音

東京 横山さくら

梅八分学生らみな願ひ込め

緩やかな列車の音や水温む

入学式靴の踵を揃へけり

青海苔搔く四万十日和の女子衆

春の雪部屋にシヨパンのノクターン

佗助を活けて素食の夕餉かな

母と子の輪袈裟からまる涅槃西風

魚氷に上る若きが揚ぐる日章旗

神奈川 山下 健治

余寒なほ鳶の笛吹く龍太の忌

如月の風なびかせて草木染

春宵の小町通りの遊歩かな

春の昼床屋の椅子に沈みけり

二階の窓大きく開けて春を吸ふ

一粒の雨の先達花の冷え

耳搔を耳に遊ばす春の宵

雛あられ紙のひひなに分けてやり

醤油醸造の百年木桶風光る

茨城 石橋 邦子



香川 妹尾 貞雪

余言

安立公彦

追込みの勉強の灯や春の雪

田嶋 洋子

仲春の季語としての「入学試験」は、「卒業」とともに、社会的にも家庭の中でも、大きな体験を持つ言葉となっている。受験生を持つ親の気苦労は計り知れない。

この句、「勉強の灯」が一切を語っている。ただこの句を読む私たちが救われるのは、「春の雪」である。この春の雪は、受験生とともに、その親のころをも、あたたかく包んでいる。この受験生はきつと希望の学校に合格したことだろう。そういう背景を持つ「春の雪」である。

春色の上着臆せず傘寿かな

宮田 豊子

「春装」や「春シヨール」などの季語には、季節の春とともに、生活の春の姿がありありと浮かぶ。

この句の「春色の上着」もそういう一つである。しかし

作者は、そこに「臆せず」と入れる。「春装」を身に纏うことに一片の気おくれもないとする。その訳は「傘寿」にある。しかも一句を「かな」止めに表現する。この下から、読み手は上五中七に戻り、改めて作者の心意気に賛同するのである。然り、八十路はまだ途上である。

寒灯消す独りの闇に浸るべく

北岸 邸子

「寒灯」「闇」とあると、奥ふかい孤独の世界を連想する。しかしこの句の背景は日常からの逃避ではない。むしろ知的世界へ自らの思いをめぐらすことにある。それは「独りの闇に浸るべく」という、強い知性から発せられた言葉からも同意出来ることである。

寒夜目醒めると、そのあと眠れない時が往々にしてある。高齢になると特別なことではない。それは寝入り端も同じである。この句には頷く人が多からう。

清せいと深呼吸せり雪間草

神田 恵琳

ここからは今年度燈下集に入集の皆さんの句について述べる。恵琳さんの句。「清せい」は「清々」。即ちすがすがしい思いを指す。「雪間草」は解けはじめた処々の土から、萌え出た草が覗く景。今年の春先はことにこの雪間草が待

ち望まれた。

この句の眼目は中七の「深呼吸せり」にある。もとより深呼吸するのは作者だが、同時に雪間草が身を覗かせて、背伸びをするかのように葉先を揺らしているともとれる所に、一句の広がりを感じられる句である。

耕すやひと振りごとの土匂ふ

小山 繁子

「耕し」という季語には、人類が大地という自然の恵みを受用するスタート台に立ったという、深い思い入れの感情が感じられる。耕し、田打、畑打などの季語は、『日本大歳時記』では、基本季語として類別されている。

この句、作者は日曜菜園を持っていて、今まさに春耕の鍬を動かしているのだ。鍬の動きにつれて畑土は掘り返される。かすかに匂う土の新鮮な匂い。「ひと振りごとの土匂ふ」が、余すところなくその思いを表わしている。

かつ丼と酒一合の余寒かな

小島 昭夫

前書に「市川大黒屋、荷風セット」とある。永井荷風の『断腸亭日乗』を見ると、昭和三十四年四月十九日の項にこうある。「晴。小林来話。大黒屋昼飯」。荷風の死は同年四月三十日。大黒屋は荷風終焉の地の近隣にある。「荷風セット」は、荷風健在の頃の、大黒屋における荷風の好んで食したメニュー。荷風没後、荷風を偲んで出来た献立で

ある。同年の日乗には、「正午大黒屋」の記述が多い。

この句、荷風探訪の吟行句か。メニュー通りの一見素っ気ない表現だが、荷風への愛惜の思いがよく出ている。

雲割つてうすき日差しや二月尽

中嶋 昌子

「二月尽」という季語は、新暦二月の終りを指す。今年の二月、関東地方は八日、十四日の時ならぬ大雪により、日常に大混乱を来した。気温も低かった。

そういう或る日、午後の雲間から「うすき日差し」が覗くのを見た作者は、待ち望んでいた「春」がようやく到来した悦びを身にしみて感じるのだった。この句「二月尽」が一句を良く支えて、季節感を写し出している。

摘むほどにふくらむ春の香りかな

渡辺 若菜

「摘草」と言う季語も、『日本大歳時記』では、基本季語として扱われている。春の野辺に、蓬、芹、野蒜、嫁菜などの野草を摘む風景は、生活の中の伝統を受け継ぐものとして、忘れることの出来ない一事である。しかし現在では、余ほど郊外に出ないと、こういう場所は見当たらない。

作者は今、郊外の小川の堤で、そういう野草の幾つかを摘んでいる。この季節の野草は香りが高い。この句、「摘むほどに」のしなやかさが良い。さらに「ふくらむ春の香り」が、読む人の心を優しく包み込む。